

《 茨城新聞に掲載されました 》

挑戦 喜びと経験語る

パラクライミング・大沼さん

美浦・木原小で特別授業

2019年のパラクライミング世界選手権に日本代表として出場した大沼和彦選手(33)＝土浦市＝が、美浦村木原にある村立木原小(戸張深雪校長)の5年生41人を相手に特別授業を行った。事故で右手の自由を失ったショックからクライミングを通じて立ち直った話をしたり、そそり立つ壁を登っている動画を見せたりして、児童に挑戦する大切さを伝えた。



昨年パラクライミング世界選手権に日本代表として出場した大沼和彦さんが、小学校で特別授業を行った＝美浦村木原

「目が見えない人、手足が不自由な人に対して、皆さんはどんな印象を持っていますか」。授業の初め、大沼さんは子どもたちに問い掛けた。教室からは「かわいそう」「声が上がった。看護学生だった4年前、友人とのバイクでのツーリング中に事故に遭った。病院で目を覚ましてから右手が全く動かないのに気がつき、パニックになった」と

当時を振り返った。食事や着替えといった日常生活のあらゆることが困難になるも、看護学生として学んだ内容を生かし、少しずつ克服した。

手術後、通っていたクライミングジムの店長にお願いして、壁を登った。「ホールドをつかんだとき、またクライミングができるんだとうれしかった」と笑顔を見せた。

クライミングを通じて多くの人と関わっていくうちに、心の傷が癒えていったという。盲目のパラクライマーが開催するイベントに参加した。「障害があってもスポーツを楽しんでいる人がこんなにいるんだ」と感動した。主催者に誘われ、競技としてのパラクライミングの世界に入った。

看護師として働く傍ら、時間があればジムに通ってトレーニングを重ねている。忙しくて登れないときは、自宅にある筋トレ器具で体を鍛える。去年、パラクライミング日本選手権の切断上肢部門で優勝し、世界選手権への切符をつかんだ。

初めての世界選手権も一つの転機になった。それまでライバルにすぎなかった他の参加者を、仲間だと思えるようになったという。

「勝ち負けではなく楽しむのが大事」と児童に呼び掛けた。

大沼さんは「やる前から無理だと諦めるのではなく、挑戦してみたら、頑張れるか頑張れないかを考えてもらいたい」と締めくくった。話を聞いた殿岡華菜さん(11)は「障害のあるなしに関係なく、チャレンジすることが大切だと感じました」と話した。(木村優斗)